沖を見よ風ゆたかにして海ひろく
　さきちる波に花のかをりあり
引き汐と書とはみるかひなみの上の
　月こそよけれまつしまの灣

竹柏園歌會十月兼題

霧

野も山もつゝみかれたる朝霧の上にそばだつふじの大嶽　伊藤梅子
霧こめて千草の花はつゝめどもつゝみかれたる野邊の虫の音　増山三雪子
七艸の色もほのゞゝみえそめて明けはなれゆく霧の中道　末松生子
旅人の駒の鈴音聞ゆれど驛路はみえず霧にかくれて　板倉止子
落椎をきそひて拾ふうなゐらの聲をのこして霧たちわたる　板倉藤子
梓弓や口や何方おぼつかな霧たちわたる玉川の里　安藤菊子
なにがしの墨繪ににたりうす霧のみほりの松をつゝむあしたは　萩野愛子
朝な夕なむかふ岡べのこすゑまで沈みはてたる霧の海原　徳富久子
おるがごとき人の往來も見えわかず朝霧ふかしろんどんの市　佐藤朝惠子
あしの海ほのゞゝ見えてはこれ山八重たつ霧ゝ今はれんとす　大竹いせ子
友どちは霧にかくれてみ山路をひとり旅ゆくこゝちこそすれ　松井とも子
立こむる朝霧の中に鳥なきてねむりし村は今明けんとす　松浦島子
かへり見ればわれをおくりこし我友の面わもみえず霧ふかうして　淺井鐵子
霧こめてやまぢは見みすさをしかのこゑする方やたかれなろらん　中村文子
海山を一つにこめし朝霧もつゝみかねけり天つ日のかみ　坪野柳子
なく鳥の聲もほのかに榛名の海うな原暗くさりこめてけり　小林しげ子
わが先にゆく人やたれ霧の中にたゞ〳〵聞ゆしほぶきの聲　池田愛子
荷おひ馬のすゞの音のみ高くして朝ぎりふかし山の下みち　鈴木光子
　長谷川柳子

歸り行く君のゆくへをみおくれば霧にかげなきこの夕べかな　有賀はる子

霧をおひて朝立いできりをおひて夕べたち歸る山のべの庵　久保花子

岡のべのさ霧の中を朝ゆけばゆめ路をたどるこゝちこそすれ　吉田靜子

玉川のきしへの柳みるが中に霧の底にも沈みゆく哉　加藤ひな子

はなもなしもみぢもいまだそめあへずみ山をかくす峰の朝ぎり　藤平雪子

吾つまが歸り來ますゑ夕霧の中ゑりもるゝ舟唄の聲　慶野華子

軒端より霧たちこめてわが山も向の山もみえずなりにけり　倭文子

かたりあふ舟子の聲もたつ霧にしめりてわかず大利根の水　佐々木信綱

千草みえず旅人みえず夕ぐれの十里の廣野たゞ霧の海

小春日や足發洗ひ居る貧書生　移雲

小春日や遊女物縫ふ格子窓　松軒

衝立に虎描きたり大火鉢　二樓

赤鞘の浪士に出逢ふ枯野哉　弦月

小春日や鯨見にゆく女連れ　郊外

白鞘の床の刀や水仙花　愛樓

頭巾にて涙をかくす女かな　鼎山

泉水を覗く鶴や冬の月　稻村

冬月や鼻息しろき鑑鈍賣　春浦

小便に行く時二時の鐘冴ゆる　芝水

鰒賣の鰒ともいはで來りけり　桑眺

冬の月叩かば玉の音やせん　圓侏

寒月や鐘樓堂の鬼瓦　鬼水

方一里人にも逢はず枯野原　杏子

六助が垣に干したる布子かな　禾鰯

煤掃に和銅開珍ひろひけり　武骨

榾焚て馬士の股火や荒蕎　龍鼓

赤帽や吹雪の中を三百騎　旭子

旅僧の頭巾あやしき時雨かな　玉浦

草屋根に夕日の殘る小春かな　千歇

燒き芋を喰ふ下駄番や寒き夜　涼月

茶筌作る信濃が家や水仙花　聽濤

唯一騎稻野驅け拔く吹雪かな　笛水

星光る乾の方や冬の雲　狐堂

置床の蕪村の軸や水仙花　乙村

惟然坊樂も苦もなき師走哉　鵬堂

風吹く櫻落葉や谷間より　春洞

冬ざるゝ古道具屋の埃りかな　綠坡

初雪の見越の松や屋中門　木公